（18）鸕宮神社（うのみやじんじゃ）

住　所：　三重県伊賀市島ケ原4689
TEL　：　0595-59-2065
拝観日：2013年5月8日、2014年8月

主祭神：　事代主命
祭　神：　大那牟遅命、神倭磐余彦命、菅原道眞、木花咲夜比賣命、市杵嶋姫命、建速須佐之男命、天照大神、豊宇氣大神、建御名方神、大物主神、大山祇神、品陀和氣神、少那比古神、稲倉魂命

鳥居と巨大な石灯籠

参道の長い石段

鳥居・拝殿・本殿

神社入り口には右手に「村社鵜宮神社」の石柱と由緒記が記された石版があり、左手には1843年に建立され、島ヶ原村文化財に指定されている高さ5.28m、重さ約58トンの石燈籠が立っている。明神造りの鳥居をくぐると、さらに100段以上の石段が待っている。両脇のヒノキ、サカキ、ヤブツバキ、ツクバネガシ、アラカシなどの大木を見ながら登っていくと、明神造りの石鳥居があり、右手に手水舎、左手に社務所があり、境内の向こうには入母屋平入破風造りの拝殿がみえる。拝殿の両脇には10基以上の石灯籠があり、両脇には阿吽の狛犬が守っている。右側の阿形の狛犬の胸には子狛がまとわりついており、大変興味深い造りが施されていた。右手には神輿庫があり、古い神輿２基と新しい神輿が１基が安置されていた。拝殿奥には鰹木が５本、外削の千木がのった流れ造りの本殿がみえる。また、社叢には上記樹木の他に、ツブラジイ、スギ、アセビ、シラカシ、サカキ、オガタマノキ、ツガ、カナメモチ、クロガネモチ、クスノキ、タマミズキ、カキノキ、ヤブツバキ、トベラ、ナンテン、イチョウ、タカノツメなどがあった。

例祭は12月20日、春祭3月20日、神楽祭4月20日、秋祭12月19日などが行われている。

鸕宮神社由緒記

当社の祭神は、事代主命外十四柱で創立由来は、天平勝宝四年（七五二）奈良東大寺の実忠和尚が開創された村内にある正月堂との関係が深い。

南都に於いて、二月三日両堂を開基され、二月堂での修二会（しゅにえ）の行法に全国一万三千七百余所の神々を勧請の際、釣りをしており遅参した若狭国遠敷明神が後悔され、実忠和尚の夢枕に立って、若狭の清水を毎年修二会行法中観世音に献ずる旨伝えたところ 二月堂参道下の岩石が裂け、白黒二羽の鸕（う）が裂け目か ら飛び立ち、清水がこんこんと湧き出したという。

手水舎

拝殿と本殿

本殿

胸に子狛がじゃれついた阿形の狛犬

このことから修二会の行法が「お水取り」の名で有名になり、実忠が感銘して遠敷明神を良弁杉の下に祀り、鸕に因んで「鸕宮神社」と称し衆庶大いに尊敬した。

是に於いて正月堂の修正会と二月堂の修二会が略同じ行法の厳修をする関係で、二月堂の鸕宮社を正月堂東南の地（現在地）に奉祀したら神妙なるべし、又南都と相似たりと勧請したのである。

菅原道真公を奉祀した由来は、天正十一年二月二十五日の洪水の際流れ来て、上川原の梅樹に止まられたのを里人邸内社に合祀したが、夢のお告げにより、雷除天神として鸕宮神社に合祀し、雷除の霊験あらたかにして、寛文六年五月神恩奉謝の意をこめて奉献した、四角灯籠が拝殿左裏に建てられている。

表参道口左側の巨大な石灯籠は、高さ五、二メートル、重さ五四、二トン、建立は天保十四年で、田畑、山林が混雑し相続にも困る状態で、八ケ年掛けて畝高を改め、無事終ったのを記念し、村人が木津川から運び米俵を持寄り積み上げたと伝えられている。

この四角灯籠と石灯籠は村指定文化財である。

島ヶ原観光協会　　「神社案内板」

由　緒：

創立の由緒不詳と雖も『延長風土記』に曰く、「島ケ原小出松竹柏有異鳥有神号天王社事代主之垂跡也」土俗の伝に、「人皇四七代廃帝の御宇皇上近江保良都より南都へ御幸の際当村に御休憩ありて一の堂宇を建設せんと良弁僧正に命じて観音堂を建築せしめ是を正月堂と称す。次いで南都に於て2月3月の両堂を開基せられ其二月堂の香水の井辺に鵜宮神社あり事代主命を祭り衆庶大いに尊敬すと是に於て里民鵬宮神を迎え、正月堂の近隣地に奉祀せば南都と相似たりとして、比地に勧請す」と言う。

菅原道具公を奉祀する以所は天正11年（1583）2月25日洪水の際本村字上川原の梅樹に流れ止まり給うを里民之れを迎えて字大父川原の奥氏の鎮座社内に奉祀祀したものである。神社古記に「菅原公御自作の木像なり」と見える。明治40年22社、明治41年3社を合祀する。

（三重県神社誌　三重県神社庁）